

古賀ゼミが暫定



村上ゼミ 2位

立教、法政、大正、茨大の4大学5ゼミコンペ



立教大学砂川浩慶ゼミ、法政大学藤代裕之ゼミ、大正大学川喜田尚ゼミ、茨城大学村上信夫ゼミ、同古賀純一郎ゼミは、11月5日午後、茨城大学人文学部で、それぞれのゼミ3年生による研究発表を競う4大学5ゼミコンペを開催した。



江川直人共同通信社水戸支局長、茨城新聞細谷あけみ鹿嶋支社長による厳正な審査の結果、「多様性がキーワード・LGBT—ひとり一人が輝くために」をタイトルに、性的少数者のLGTB問題を扱った茨大の古賀ゼミが暫定1位に輝いた。



2位は、「ゆとり世代が考えるメディア接触」の村上ゼミ。第3位は、東日本大震災などを機に始まった、過剰ともいえるような“自粛”について考察した「なぜ日本は自粛する!？」の立教大学の砂川ゼミ。4位は、クールジャパンの一環として漫才の国際化を考える大正大の川喜田ゼミは、「MANZAIを世界語に」、5位は、法政大学の藤代ゼミは、島根県真砂地区の地域創生を考える「バズるコンテンツは地域の課題を解決するのか」。



審査員の江川支局長と細谷支社長は、古賀ゼミの1位となった理由について、①テーマが、話題性や時流をとらえていた②具体的なデータ、数字を明記したのがよかった③聴衆を引き付けるような語り方がよかった—などと論評した。

シンポジウムには、特別講師として朝日新聞編集委員の奥山俊宏氏が、ジャーナリズムの在り方や、最近話題になっている奥山氏が手掛けたパナマ文書についての意義などについて講演した。

終了後は、茨苑会館に場を移して表彰式を兼ねた4大学の懇親会を開催、用意してきたパワーポイントによる各ゼミの紹介で盛り上がった。

5年前に開始したゼミコンペは今年で5回目。各ゼミが思い思いのテーマを設定し、研究した調査などを20分間にまとめて発表、終了後は各ゼミの質問に答える形になっている。本発表は、来年1月に立教大学で開催される予定。

